

平成二十六年六月一日発行 第二十四卷第六号 通巻第二七六号 毎月一回一日発行  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐 かい

岡井省二創刊

平成26年6月号



# 運命

高橋将夫

禅門の一匹として蠅生まる  
人間も蛙も尻尾失なへり  
大田螺過去も未来も田の中に  
時勢とは春の日傘の白と黒

飛び交つてをり春塵も素粒子も  
雁帰る人忙しくなるころに  
ふらここの漕ぎ方膝が思ひ出す  
上昇はつくしんぼから遠ざかる  
猫の子もコンピューターも学習す  
運命も二つに分けて菊根分  
足の先から陽炎となつてゆく

# 槐安集

水野恒彦

白鳥の帰りし空や喪服着て  
日をのせて岸離れゆく浮氷  
カルストの巖を焦し野火猛る  
春月や女体に在す畝傍山  
飛ぶ鳥も光のかけら弥生尽

加藤みき

大千瀉みるみる機首の上がりたる  
春潮や見えざるものに出合ひたる  
岩の間に清みきつてあり忘れ潮  
磯の匂土の匂や熟睡す  
またしても探す四つ葉のクローバー



中島陽華

杭木を叩くや雉の高鳴きす  
いたち草肘鉄砲もなつかしく  
立春の耳にほくろのある男  
緋毛氈抱へられけり月おぼろ  
関取の墓の真砂の花すみれ

竹内悦子

禰宜の沓通りすぎたる春の泥  
榎の木寂照寺の湯舟なりけり梅三分  
春時雨八角輪堂一切経  
桃の日の梅を見にゆく彼岸かな  
竜天に登ると見せて一泊す

雨村敏子

唐大和上東征伝地に椿  
春の土耕してをる寿限無かな  
はこべらの陣取り合戦頼もしや  
鳥風の吹いては止みぬ池の端  
老いて良き雛の夜や湯の溢れ

近藤喜子

雲雀野をわがものに即興詩人  
君に振る衣手ほしき春野かな  
雲間より天使の梯子蝶生まる  
ちちははの記憶澄みゆく茅花かな  
春蘭や山霊の先づ触れてゆく

本多俊子

日輪はひとりにひとつ青き踏む  
遠き木に遠き風ある春景色  
紅梅や余生も夢をもちつづけ  
命とは光とおもふ雁帰る  
眼まな間かひに秘仏ののこる櫃の花

瀬川公馨

雲水の鉢のうちそと二月尽  
春の靴織部好みのへうげもの  
荒くれのポイルで食らふ金目鯛  
二三日雪解の音や忘れ水  
ニセアカシアの無心に遊ぶ花の塊

久保東海司

梅日和池は鏡の如く照る  
鳶の輪の大きくふくれ野に遊ぶ  
群れ見張る高さに止まる寒鴉  
綾取りの梯子を雪の降り包む  
湖の神見守る鴨の潜り継ぐ

中野京子

一夜にて木々には春の雪の花  
草や木のサインに北を開きけり  
薄刃をばふはりと受けて春キャベツ  
さくら餅食ふに日当る虚空かな  
火が紙を食みゆくごとし山火燃ゆ

柳川 晋

水垢離の水に映りし春の潮  
踏絵の絵踏めとは言うてくれぬなり  
春一番虫の知らせはよく当たる  
還暦や蓬が餅となる時間  
帯解きて春の雲にもなりぬべし

岩下芳子

竣工のビル春日に包まれし  
渦潮の大渦躰の傾ぎたる  
春眠をむさぼる本を積み上げて  
山腹に声を上げたる山法師  
信楽の火色さし込む春の陶

近藤紀子

標本木の桜の蕾うす緑  
囀を追うて至れり楠葉宮  
ひとことが余韻となりし遅日かな  
雛の夜の座敷ためらひつつ開ける  
朧映す卑弥呼の魔鏡ありにけり



# 槐市集

有松洋子

山の水飲んで遍路の透きとほる  
山独活の森の奥吹く風を食ぶ  
アネモネやゴルゴダの丘赤く染め  
花冷や眉間にちから入れにけり  
想念や桜の下 の 黒き猫

犬塚芳子

くれなゐの芽吹きのととなりけり  
木蓮の輝く白さ陽を放つ  
日の乱れ風も乱れて湮般木かな  
日の流れ運河のやうに冴返る  
雲雀野に日の膨らみて乱れなし

犬塚李里子

夕光の連翹に来てたゆたへる  
夜は星とささやき交はず雪柳  
別るるは会へる楽しみ花芽吹く  
胸底に少女のこころ春怒濤  
恋つづるペンをおきたる目借時

井上静子

絵画展にふるさとを見る蟻の道  
黒土に葱の種蒔く朝日かな  
山笑ふ未定のつづくカレンダー  
筆先を梅のかをりのつつみこむ  
酒蔵の匂ひ届きし花董





岩月優美子

理を曲げぬ利休の眼竹の秋  
少年の遅しくあれ芦の角  
日と風に一喜一憂つくしんぼ  
地虫出づ澄みし空気の吸ひたくて  
紅椿人恋ふこころ捨て切れず

江島照美

我が胸の内にもありぬ牡丹の芽  
万両の真白の中に華やげり  
啓蟄や生くる理由のあるといふ  
春寒し指輪の回る白き指  
四季といふ生命感ずる春の土

熊川暁子

青き踏む今日と言ふ日を生かされて  
お水取り随喜の火の粉熱からず  
春炬燵帰したくなき茶客かな  
地虫出づ身の内五分は魂とやら  
ロボットも己が影見し余寒かな

後藤マツエ

波の花吹き散らされてまた海へ  
鳥帰る薄紫に烟る空  
天に描く淡き色合ひ春の虹  
喜びも苦しきもあり日永かな  
鴨引きて浜に安堵の戻りけり

阪倉孝子

人過る影やさしかり春障子  
蒼天の果ては浄土か白木蓮  
蓬つむ遙けし日々の無音かな  
山笑ふ窓をとび出す竹とんぼ  
晩節の行方は何処春の雲

柴田靖子

山茱萸の今かがやきの時ですと  
ひそやかに遅しくあり蘆の角  
春暁や音なき雨の中目ざめ  
父と子のゆらすふらここ日やさし  
手も足も失ひしかに朝寝かな

# 槐集

## 高橋将夫選

初蝶を見つけし声の飛んでをり  
枚方 熊川 暁子

菜の花の眼にしみるにほひかな

辛夷咲き全山動く気配あり

春あけぼの一寸法師の櫂の音

削られてむしられて山笑ふもんか

寄り添うたままで流るる雛かな  
大阪 江島 照美

恋のごと匂ひ重ねの雛の衣

利休忌や計れぬ幸と不幸あり

歳月を重ね瞳の仲となり

空広ぐクレーンつかふ大剪定

花冷や光はくだけつつ散りぬ  
有松 洋子

満開の花に溶けだすからだかな

見し花に囚はれしまま眠るかな

春疾風風の体積あふれけり

胸中に春風の立つ絵本かな

逃げ水の行く手を阻む男山  
寝屋川 前田美恵子

利休忌や二つほほばる胡麻団子

春風の入り込む地下の曼陀羅図

山崎に三川望む日永かな

胸の内明かさぬままや春の虹

春の雲天女の衣靡きをり  
岡崎 岩月優美子

春夕焼明日の夢を浮き立たす

ボツティチェリの絵より聞ゆる春の詩

初蝶の浮遊に風の見えて来し

沈丁の香り纏ひし過客かな

逃げ水や湖岸道路を一周す  
枚方 谷岡 尚美

幾曲り廊下の奥の涅槃像

桃の日やきのふの蕾皆ひらく

楽となる声明のこゑ春障子

山椿天王山に降る靈気

# 銀河往来 高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

削られてむしられて山笑ふものか 熊川 暁子  
強烈なインパクトを与える一句、自然破壊に対する警鐘の句で「削られて」の後に「むしられて」「山笑ふものか」と畳みかけた表現は豪快。特に「山笑ふものか」は作者でなければ出せない表現だろう。

一転してへ春あけぼの一寸法師の擢の音の句はどうだろう。昔話の世界である。掲句とのギャップがそのまま作者の作品の懐の深さなのだ。

〈辛夷咲き全山動く気配あり〉は俳句の王道を行く句であり、〈菜の花の眼にしてみるにほひかな〉の句の「匂いが眼にしてみる」は黄一色の広大な菜の花畑を想起させる感性の一句。

〈初蝶を見つけし声の飛んでをり〉の句、初蝶を見て、「あつ、ちようちよ」「ちようちよ」という声があらこちで飛び交う。蝶が飛んでいるのだが、声まで飛び交っている。  
どの句も理屈抜きで楽しめよう。

歳月を重ねる 臙の仲となり 江島 照美

句意は明快。幾年月を経て、ようやく二人の仲は臙といえる状態になったという。しかし、解釈となると、読者に委ねられる部分が大い。「恋人の仲」もなくはないが、私は素直に謡曲「高砂」の翁と娼を思い浮かべた。へ寄り添うたまままで流るる難かな〉の句は、流し難が波にもまれながらも寄り添ったまままで流れていく景で、どこか掲句に通じるものがある。

〈恋のごと匂ひ重ねの雛の衣〉の句の「匂ひ重ね」は衣を重

ねて着る場合の色目の重ね方の一つで、上から薄い順に色を配するもの。どうやら、この雛の十二単はたくさん色目の恋を重ねたようだ。

〈利休忌や計れぬ幸と不幸あり〉の句では「利休忌」という季語の幹旋が的確。「計れぬ幸と不幸」への思いを秀吉に切腹させられた利休の数奇な運命に託したわけである。

〈空広ぐクレーンつかふ大剪定 空はばかりでなく剪定という季語の本情まで大きく広げたといえる。どの句にも作者ならではの視点があり、その感性も素直に受け入れられよう。〉

胸中に春風の立つ絵本かな 有松 洋子

胸中にはさまざまなものが去来する。しかし、絵本を見て胸中に春風を感じる感性は作者ならではのものと思う。〈花冷や光はくだけつつ散りぬ〉の句の「光はくだけつつ散る」や、〈満開の花に溶けだすからだかな〉の「花に溶けだす身体」や、〈見し花に囚はれしまま眠るかな〉の「花に囚はれたまま」や、〈春疾風風の体積あふれけり〉の「あふれる風の体積」もまた作者ならではの視点、感性で、ものごとの本質に迫っている。

逃げ水の行く手を阻む男山 前田美恵子

逃げ水は追うと逃げる。その先を山が阻んでいるというのが、男山であるところが眼目。

〈利休忌や二つほぼばる胡麻団子〉〈胸の内明かさぬままや春の虹〉もまた俳諧。

ポッティエリの絵より聞こゆる春の詩 岩月優美子

ポッティエリは初期ルネッサンスの画家で有名な作品がたくさんある。「春」という題の絵からは、たしかに春の詩が聞こえてくる。(以下略)